

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 桃木 芳枝

論 文 題 目

大学生のメンタルヘルス問題発生メカニズムに關与する
共感—システム化の構造と機能の検討

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 石井 秀宗

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井 次郎

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 溝川 藍

論文審査の結果の要旨

青年期後期にあたる大学生にとって、この時期は新たな自己を形成していく過程にあり、自己との葛藤、対人関係や異性問題、将来の職業選択など多くの悩みを抱え(杉村,2001)、これらが原因で心身の健康を害することも多い。また、対人関係や学業などの日常生活で生じる様々なストレスが生活面での不適応を引き起こし、その不適応が原因で心身症傾向、うつ傾向、不安傾向などを誘発する(Schönfeld, et al. , 2016)。よって、生活面での不適応が原因で誘発されるメンタルヘルス上の問題発生メカニズムを明らかにすることは精神疾患の早期発見にもつながる重要な課題と考えられる。

メンタルヘルスの問題を引き起こす要因の 1 つとして、思考形式などの認知スタイルの重要性が指摘されている(Calmes & Robert, 2007 ; Kertz, et al. , 2015)。認知スタイルとは、生来個人に備わっている無意識的な特質であり、外界の情報をどのように取り入れ、処理し、判断するかという認知活動の様式にみられる個人のタイプをいう(Riding & Rayner, 1998)。本研究では、なかでも人間の基本的な認知スタイルとして提案されている Baron-Cohen(2002)の共感—システム化に着目する。

人間の因果的認知には、欲求や感情・意図などの心的状態の因果関係を認知する心的認知と、物理的な世界の因果関係を認知する物的認知が認められている(Cosmides & Tooby, 1994)。この理論に基づき Baron-Cohen(2002)は、心的認知を共感(Empathizing)、物的認知をシステム化(Systemizing)とした。共感とは、他者が何を感じ、何を考えているかを知り、それに反応して適切な感情を催すことをいい、システム化は対象物のメカニズムやシステムを分析し、規則性を解明する働きをいう。本論文の目的は、大学生の「共感—システム化」という認知スタイルの構造と機能を明らかにし、共感—システム化を指標として、メンタルヘルスの問題発生メカニズムを解明することである。

本論文は、6つの章で構成されている。

第1章では、研究の背景と本論の目的について述べた。

第2章では、Baron-Cohenの共感—システム化について詳述した。

第3章から第5章では、本研究で行った4つの研究を扱った。4つの研究の概要は次の通りである。まず、先行研究において明確にされていない、共感およびシステム化の下因子構造を明らかにし(研究I-1)、ついで、共感—システム化の機能について検討した(研究I-2 および研究II)。そして、Lazarus & Folkman(1984)の心理的ストレスモデルに基づいて考案された加藤(2001)のモデルを参考にして、対人ストレスを負荷したモデルを構築し、共感—システム化の機能を検証した(研究-III)。以下、各研究で得られた示唆について述べる。

論文審査の結果の要旨

研究I-1(第3章1節)では、共感—システム化の下因子構造を検討するため、大学生を対象に質問紙法によって得られた有効回答(981名分)について探索的因子分析を行った。共感からは、「共感的気づき」と「社会的ルールの認識」の2下位因子、システム化からは、「メカニズムへの関心」、「規則化・法則化への興味」、「空間の構造化」の3下位因子が抽出された。興味深いのは、「共感的気づき」には、いかに他者の立場に立って考えられるかという認知的共感を測定する項目が多く含まれており、かわいそうに思う、自分も同じように苦しくなるといった共感は含まれていなかったことである。

研究I-2(第3章2節)では、個人内要因である性役割意識と、共感とシステム化の各下位尺度、およびメンタルヘルスとの関連性を検討した。重回帰分析の結果、男女ともに、性役割意識の「男性性」および「女性性」が共感の「社会的ルールの認識」を促し、メンタルヘルスの状態を示す心理的ストレス症状を軽減することが示唆された。また、女性において男性性が高いと、自らの性とは異なる男性性という性役割からシステム化に即した行動が促されるため心理的ストレス症状を高める可能性が示された。

研究II(第4章)では、共感—システムが日常生活ストレスと心理的ストレス症状に及ぼす影響の性差について検討した。ここでは日常生活ストレスとして、対人ストレス、実存的ストレス、および大学・学業ストレスを取り上げた。大学生から得られた有効回答(977名分)について多母集団同時分析を行った結果は次のとおりである。男性では、共感が対人ストレスを媒介して心理的ストレス症状に負の影響を与え、精神的健康を高めた。女性では、システム化が対人ストレスを媒介して心理的ストレス症状に正の影響を与え、精神的健康を低めた。実存的ストレスについては、男女ともに、共感が実存的ストレスを媒介して心理的ストレス症状に負の影響を与え、精神的健康を高めた。さらに、男性では、システム化が実存的ストレスを媒介して心理的ストレス症状に負の影響を与え、精神的健康を高めた。

研究III(第5章)では、加藤(2001)のモデルを参考にして、対人ストレスを負荷したストレスモデルを構築し、認知的評価/コーピングの過程における共感—システム化の機能を検証した。大学生から得た有効回答(1,090名分)について共分散構造分析を行った結果、共感—システム化が認知的評価に、認知的評価がコーピングに、コーピングが心理的ストレス症状にポジティブあるいはネガティブな影響を与えることが明らかになり、共感—システム化が対人ストレスモデルにおいて機能することが検証された。

第6章では、本論文のまとめと今後の課題について論じた。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

以上の論文の内容に対して、審査委員から次のような質問及び指摘がなされた。

- ・性別による違いは文化的性役割感の観点から議論できる可能性はないか。
- ・大学生だと文理の別等、専攻分野による違いもあるのではないか。
- ・今後、中学生や高校生を対象とした検討を行う場合、どのような発達的变化が考えられるか。
- ・メンタルヘルス問題の理解や予防に繋がる議論や考察がさらに深められると良い。

これらの質問や指摘に対し、申請者から適切な応答がなされ、また、本論文・研究の限界及び今後の課題についても適切に認識していた。

本論文は、大学生の精神的健康について、精神疾患に至る前のメンタルヘルス上の問題発生メカニズムを検討したものである。指標として、基本的な認知スタイルとして提案されている Baron-Cohen(2002)の共感—システム化を、単独でなくあわせて用い、ストレス、認知的評価、コーピング等に関連する共感—システム化の機能を詳細に検討したことは本研究の独創性なところである。また、大学生のメンタルヘルス問題発生を予防するために、個々の認知スタイルを把握した上で、ネガティブな方向に向かう可能性のある学生にはより適切な問題の解決策を気づかせるように支援し、心理的ストレス症状を軽減できる可能性を示唆しているという意義も認められる。

よって、審査委員会は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文の審査結果を「可」と判定した。